

全日本学生庭球同好会連盟 韓国遠征 報告書

2024年9月3日
全日本学生庭球同好会連盟
理事長 松末陽人

2024年8月7日～8月11日(栗山会長は8月10日～12日、市毛参与は8月7日～12日)に実施された全日本学生庭球同好会連盟 韓国遠征についての詳細を以下に報告します。日本の選手を含めた韓国遠征は5年ぶりになるため、今年と来年以降の日韓大学生テニス交流の方向性について韓国大学テニスクラブ連盟と全日本学生庭球同好会連盟で協議した。

日本チームは、団体戦(男子ダブルス、女子ダブルス、ミックスダブルス)に参戦した。

また、韓国遠征日本チームは日本の学生達の代表として訪韓するため日韓のテニスの試合だけでなく日韓の交流をすることが一番の目的になります。そして2024年9月9日～11日に有明テニスの森で開催される日本の大会においては日本と韓国の交流が円滑に進むように繋げることが今後大切になります。

1. 韓国遠征日本チームメンバー

① 栗山 雅則 (くりやま まさのり) 구리야마 마사노리

日本チーム団長
全日本学生庭球同好会連盟 会長
関東学生庭球同好会連盟 会長
公益社団法人日本テニス事業協会副会長



② 市毛 彰 (いちげ あきら) 이치게 아키라

日本チーム副団長
全日本学生庭球同好会連盟 参与
第7代全日本学生庭球同好会連盟理事長(1989年)
東京都スポーツ指導者協議会 理事
法務省 保護司
日本テニス協会公認テニスコーチ2
府中市立府中第四中学校テニス部指導員
東京理科大学卒業



- ③ 松末 陽人 (まつすえ はると) 마츠스에 하루토
日本チーム学生代表
全日本学生庭球同好会連盟 理事長
関西学生庭球同好会連盟所属
同志社大学 2年
同志社大学硬式テニス同好会



- ④ 김 윤ギョン 김윤경
日本チーム学生副代表
全日本学生庭球同好会連盟 総務
関西学生庭球同好会連盟所属
京都大学 2年
京都大学・TCT



- ⑤ 岡田 康佑 (おかだ こうすけ) 오카다 코스케
関西学生庭球同好会連盟所属
関西学院大学 4年
ASH



- ⑥ 石田 凜太郎 (いしだ りんたろう) 이시다 린타로
関東学生庭球同好会連盟所属
早稲田大学大学院 1年
早稲田大学理工硬式庭球部



- ⑦ 立身 真菜 (たつみ まな) 타즈미 마나
関東学生庭球同好会連盟所属
一橋硬式庭球同好会



- ⑧ 八嶋 亜未 (やしま あみ) 야시마 아미
 関東学生庭球同好会連盟所属
 津田塾大学 4年
 一橋硬式庭球同好会



2. 日韓学生テニス交流の応援と韓国 OBOG 大会参加

OG 参加者

- 西村 弥子 (にしむら みつこ) 니시무라 미쓰코
 ・2024年8月9～11日韓国滞在
 鳥取県議会議員
 福祉生活病院常任委員長
 鳥取県テニス協会 会長
 中国テニス協会 副会長
 日本テニス協会 評議員
 1990年全日本学生庭球同好会連盟 第2回韓国遠征日本チーム選手
 早稲田大学卒業



3. 韓国遠征中のスケジュール

仁川国際空港 第一ターミナルの到着ロビーEの前のインフォメーション前に15時に集合とします。※仁川国際空港に到着したらフリーWi-Fiを接続しLINEで連絡を取ります。(図1参照)

第1旅客ターミナルインフォメーション

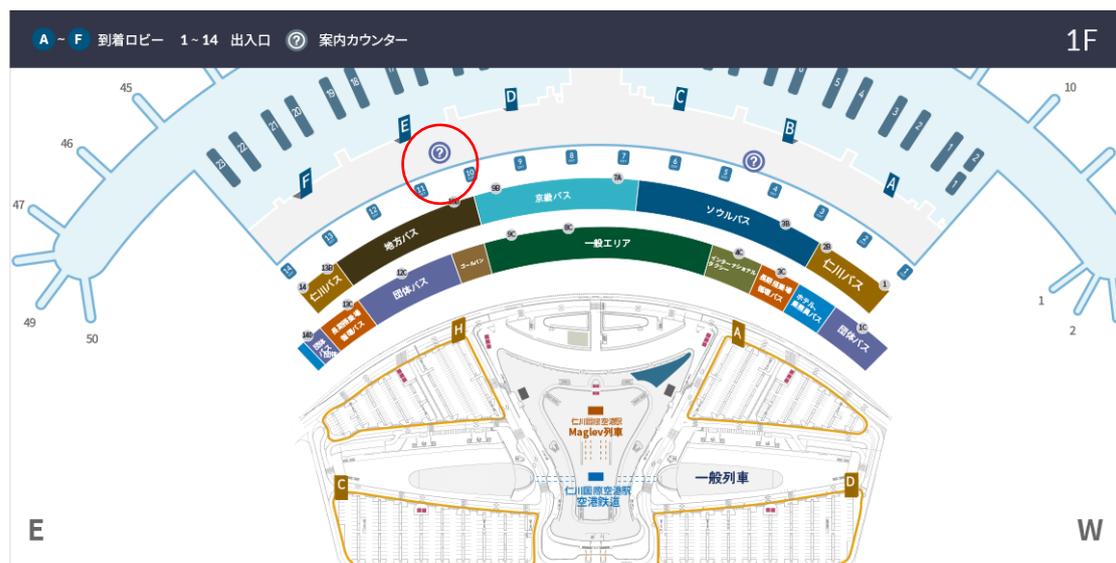


図1 日本チームの集合場所

(1) 日本からソウルへの飛行機での移動スケジュール (敬称略)

① 松末、キム、岡田

2024年8月7日

12:50 エア プサン BX171 関西国際空港 T1 発

14:50 仁川国際空港 T1 着

※2024年8月7日の仁川国際空港で連絡を取り合い仁川国際空港 T1 の入国ゲート前で
15時頃日本チームが集合。

② 市毛 副団長

2024年8月7日

11:30 イースター航空 ZE602 新東京国際空港 成田 T2 発

14:35 仁川国際空港 T1 着

※2024年8月7日の仁川国際空港で連絡を取り合い仁川国際空港 T1 の入国ゲート前で
15時頃日本チームが集合。

③ 石田、八嶋、立身

2024年8月7日

11:10 ジンエア LJ204 新東京国際空港 成田 T1 発

13:40 仁川国際空港 T2 着

※2024年8月7日の仁川国際空港で連絡を取り合い仁川国際空港 T1 の入国ゲート前で
15時頃日本チームが集合。

第2旅客ターミナル3階5番ゲート前バス乗り場から無料バスに搭乗し T2→T1 へ移動する。
(図2参照)



図2 仁川空港でのT2からT1へ移動するための無料バス

④ 栗山団長

2024年8月9日

12:05 アシアナ航空 OZ1075 東京国際空港 羽田 T3 発

14:25 金浦空港 1 着

⑤ 西村

2024年8月9日

15:50 エア ソウル RS746 米子空港発

17:45 仁川国際空港着

(2) 2024年8月8日～10日 韓国大学テニスクラブ連盟主催 2024年韓国大学テニスクラブ連盟主催大会へ参加

※栗山、市毛は、2024年8月10日～11日 韓国大学テニスクラブ連盟 OBOG 団体戦大会へも参加し、今後の学生連盟の支援について協議する。

(3) 韓国遠征での宿泊先

Fox Hotel

フォックス ホテル

151-809

208-4, Gwanak-ro, Gwanak-gu Seoul

TEL 02-876-7001



(4) 日本チームの日本への帰路について

① 松末、キム、岡田

2024年8月11日

15:50 発 エアプサン BX176 仁川国際空港発

17:45 着 関西国際空港着

① 石田、八嶋

2024年8月11日

16:05 発 チェジュ航空 7C1108 仁川国際空港発

18:30 着 新東京国際空港 成田着

③ 立身



2024年8月11日

15:05 発 チェジュ航空 7C1104 仁川国際空港発 T1

17:30 着 新東京国際空港 成田 T3 着

④ 栗山

2024年8月12日

15:45 発 アシアナ航空 OZ1045 金浦空港 1 発

17:50 着 東京国際空港 羽田 T3 着

⑤ 市毛

2024年8月12日

16:05 発 チェジュ航空 7C1108 仁川国際空港 T1 発

18:30 着 新東京国際空港 成田 T3 着

⑥ 西村

2024年8月11日

13:25 エア ソウル RS745 仁川国際空港発

14:50 米子空港着

4. 韓国大学テニスクラブ連盟への贈り物

① 韓日大学生テニス交流の横断幕

2023年に全日本学生庭球同好会連盟から韓国大学テニスクラブ連盟へ贈呈した。

今回の大会では会場に持参されたものの使用することはなかった。今後、韓国の大会で活用されることを願う。



図3 横断幕のデザイン

4. 日本チームのチームウェア

図4をチームシャツにアイロンプリントをした。経費削減のため、アイロンプリントのデザインは自作しアイロンプリント作業についても専門業者には依頼しないで日本チームが実施した。

青のTシャツは市毛参与から日本チーム学生へのプレゼントである。



図4 チームウェアのマークデザイン

5. 海外旅行保険の加入

海外旅行保険を契約。松末理事長が手配した。日本チーム内では傷害事故は発生しなかったが、大会期間中熱中症で入院した韓国関係者がいたこともあり、今後も加入は必修である。

6. 名刺

市毛参与が作成し日本チームの学生にプレゼントした。

名刺があることにより、試合後や夕食会時の交流を促進に進んだとの感想が日本チーム学生からあった。



7. Wifi

各自の判断による。ホテル内 Wifi 有。

8. 持ち物

①タイプCのコンセント変換プラグ。

韓国のコンセントの電圧は 220V。日本は 100V なので、日本の電化製品を韓国で利用するには電圧差に注意が必要です。220V に対応していない電化製品をそのまま使ってしまうと電化製品の破損の可能性だけではなく火災のリスクもあるため、必ず手持ちの電化製品が 220V に対応しているかチェックする必要があります。

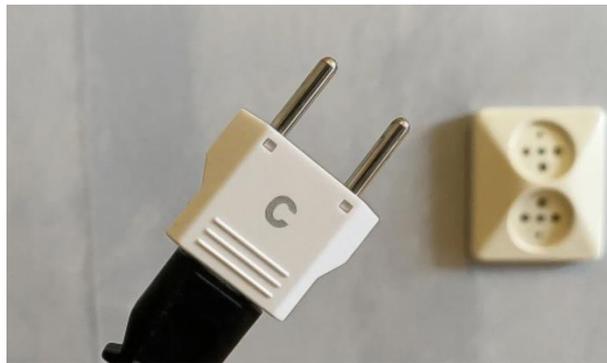


図5 タイプCのコンセント変換プラグ

②荷物を少なくするために極力衣類はホテルで洗濯するようにしましょう。そのための洗濯洗剤。

③テニス用具

④ 파티어에招かれることもあるので、Yシャツ、スラックス、スカート。

2024年8月9日韓国大学テニスクラブ連盟会長主催の夕食会で着用し名刺も持参した。

⑤ 韓国大学テニスクラブ連盟への手土産

韓国大学テニスクラブ連盟のスタッフ用に12枚(L6枚、M6枚)を自作しプレゼントとした。韓国の大学生スタッフが着用し思い出と記憶に残る土産になったと思われる。



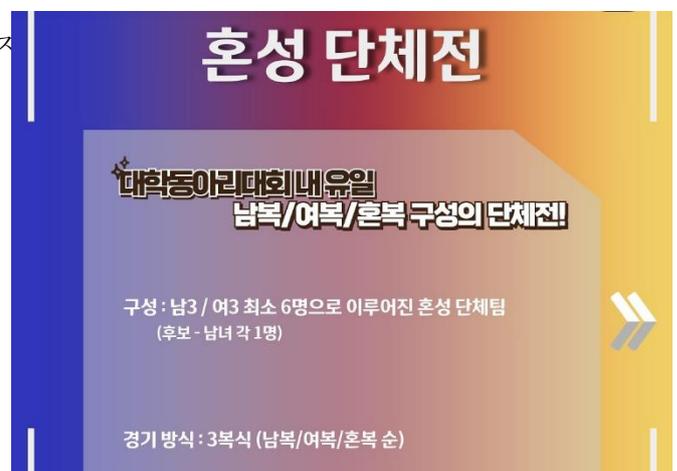
図6 手土産

9. 大会会場

ソウル大学テニスコート

人工芝コートとクレーコートを併用された。

<https://maps.app.goo.gl/zD5oMsy2XnmCbMSMA>



개인전(남/여 단식)

대학대회에서 접하기 힘든 단식 개인전을 접해볼 기회!

〈남자 단식〉 - 48팀
경기 방식: 예선 리그전 후, 본선 토너먼트 진행

〈여자 단식〉 - 24팀
경기 방식: 예선 리그전 후, 본선 토너먼트 진행

일본 FESTA 선발전

일본 FESTA대회파견 기회 제공!

대상: 2024 WILSON 한국대학테니스동아리연합회장배 남복/여복 개인전 8강 진출자

경기 방식: KDK방식

선발 혜택: 일본 파견 비용 일체 지원 (항공권 및 개인 비용 제외)

응답하라 1989

동아리내OB와YB의 화합의장 마련!

대상: 졸업한 대학의동아리 출신 OB / 해당 학교 재직 중인 교수

구성: 성별 무관 최소 참가 인원 수 6인으로 구성 (후보 - 최대 2명)

경기 방식: 3복식 (동아리 OB팀 / 교수팀 분리 출전)

图 7 韩国大学テニスクラブ連盟主催の大会のInstagramによる広報



図 8 ソウル大学テニスコートでの韓国大学テニスクラブ連盟主催の大会



図 9 昨年の秋に開催された韓国大学テニスクラブ連盟主催の大会に日本の役員が遠征で今後の交流・遠征の進め方について学生間で協議された



図 10 大会開催要項 (大会開催 1 カ月前までには、日本チームのメンバーの写真、プロフィール等の情報を韓国連盟に伝える必要がある)



図 11 会場の様子 (全日本学生庭球同好会連盟 旗と韓国大学テニスクラブ連盟旗は日本から持参し取付することになった。大会後は持ち帰る)



图 12 閉会式の様子（日本チームが団体戦で優勝）



图 13 大会中の交流の様子（日本からの応援もあった）

11. 日本チームの会計報告

全日本学生庭球同好会連盟 韓国遠征 会計報告

2024年8月7日～2024年8月11日

項目	金額	概要
役員交通費	390,900	選手6名 大人2名
海外旅行保険料	9,480	
衣類	151,813	プレゼント及びユニフォーム
Wi-Fi 利用料	4,600	
雑費	370	
支出計	557,163	

上記の通り、報告いたします。

2024年9月3日 会計理事 都筑拓弥

11. 第1回韓国大学テニスクラブ連盟 OBOG 団体戦大会

韓国の学生連盟の支援を増やすためには、OBOG の存在が必要不可欠であることから OBOG が学生の大会会場に来るきっかけを目的として第1回の大会が企画された。

8名×10チームの合計80名が参加した。韓国はOBOGが進んで大会運営をスタッフとして手伝う姿があり、日本の場合は、OBOGは大会会場に来ることが稀であることから違いを感じた。

日本も招待を受け栗山会長と市毛参与が参戦し西村OGは応援として参加した。少人数であるが参加したことに意義があると感じた。

12. 日本チームの感想

①栗山雅則 日本チーム団長

私は、8月9日（金）に羽田を発ち、ソウルの金浦国際空港に着きました。迎えに来てくれた車に乗って、ソウル大学の近くの宿泊先であるホテルに移動しました。その日の夕方に、我々日本チームに対して歓迎会を開いて頂きました。韓国側からは、韓国学生テニスクラブ協会の Hyun Sang, Joo 会長の他、5人の役員をはじめ、数名の若い OBOG の役員が出席しました。日本側は、市毛彰参与、西村弥子鳥取県テニス協会会長、全日本学生庭球同好会連盟の松末陽人理事長他、学生の遠征チームも同席しました。10日（土）は、日韓の OBOG 約 90 名の方々が参加して、グループに分かれて団体戦が行われました。また、日韓の学生チームの団体戦が行われ、日本チームが見事優勝しました。11日（日）に、ペースラーさんの案内で、オリンピックパーク内にあるテニスセンター（スタジアムを含む）を見学しました。ここは 1988 年のソウルオリンピックの為に造られた施設です。その後、すぐ近くにある国立韓国体育大学校を見学し、様々なスポーツ施設が充実していると感じました。この時期、パリオリンピックが開催されていますが、この大学からオリンピックメダリストが多数出ていると聞き、感銘を受けました。そして、すべての予定を終えて、12日（月）に日本へ帰国しました。今回の交流で一番感じたことは、韓国側のおもてなしがとても素晴らしかったことでした。次回は9月に東京（有明テニスの森公園）で、FESTA2024 を行ないますが、我々が受けたこと以上のホスピタリティを持って、韓国チームを歓迎することが重要だと感じました。今回の遠征で、準備をして頂いた市毛彰参与、並びに松末陽人理事長他、学生の役員、選手に謝意を表します。

②市毛 彰 日本チーム副団長

35 年前にスタートした日本と韓国との大学生のテニス交流であるが、スタートさせた責任もあり、現在も両国の学生連盟を支援している。

5 年前の 2019 年 2 月に韓国遠征をする計画であったが新型コロナウイルス感染拡大の影響で遠征を休止にして以来韓日大学生テニス交流の休止が続いていることが残念であった。そんな状況から、2023 年度の日本の学生代表と韓国の学生代表に電話をしてこの交流の意義やこれまでの経緯を説明し交流の復活を働きかけました。その結果両国の学生代表が私の志に同感し韓国で両国の学生役員が話し合う機会を設けることが出来ました。そして 2024 年度の日本チームとしての遠征が実現できました。

今回の遠征は選手を含めたりスタートとなり、前任者からの学生間の引継ぎがないことから松末理事長を補佐する形で一緒に準備や韓国側との調整を進めました。私自身、日本チームの学生とは初対面でありどんな日本チームになるのか不安がありながら仁川国際空港で集合することになりました。集合まで時間がかかったことから日本チームとしての自己紹介や挨拶をする機会を作る思いがありましたが時間的な都合で実施できずにホテルへ移動することになりました。大会初日の午前中が降雨のため急遽観光になりました。1 日の観光のおかげで日本チームが徐々にチームになって来たと感じました。団体戦の試合の中ではペアの組み合わせを工夫しそれぞれの長所を生かす

ことが自然にできていたことから優勝することが出来たと思います。最後は即席のチームではなく本当のチームになれました。遠征前は、選手達は試合のために訪韓することが主目的で韓日の学生間の交流の大切さを理解が少ないと思われましたが、試合後に対戦チームと交流をしている姿が多くみられるようになり安堵しました。過去の韓国遠征の経験から日本の学生は交流に対して積極度が低いので交流のきっかけとして名刺を私からの日本の学生へのプレゼントとしましたが、名刺の活用で交流が進んだとの感想が日本の学生からあり嬉しく思いました。韓国連盟は、多くの支援者が学生の活動を応援していますがさらに支援を強化することが必要なことから OBOG 大会が初めて同時開催として企画されました。一方日本は卒業してしまうと OBOG が離れていってしまうことから支援者が少ないことが日本の課題だと感じます。また、学生の自主自立で学生連盟が継続されて来ましたが、長期的な繋がりが大切なスポンサーや会場施設との関係性を引き継ぐことが学生間での引継ぎの不足により上手くいかないことがあるのを連盟として検討していく必要性を感じます。学生の自主自立を継承しながら学生と支援者が同じ目線で協調していくことが必要かと韓国連盟の体制をみて感じました。今回の韓国遠征は、終了しましたが日本チームで再会したり、韓国の学生との個々の繋がりが数年で途絶えないように、連絡を取り合い継続してもらえると嬉しく思います。今回の遠征は学生にとって人生で一番の経験になったことでしょう。今回の韓国遠征に参加した学生がより広い視野を持ち、周囲の人への思いやりは心配り挨拶がよりできるような大人に成長するターニングポイントになることを期待します。

③松末 陽人 日本チーム学生代表

今回の遠征には、学生代表として参加いたしました。遠征前には、選手が韓国で安全に過ごせるように、航空券の予約や保険の加入など、万全の準備を心がけておりました。

遠征初日は、初めての海外ということもあり、緊張や不安が大きかったです。しかし、韓国に到着し、韓国の学生の皆さんが親切にしてくださったことや、通訳の方々のおかげで言語の壁にそれほど阻まれることもなく、リラックスすることができました。

2日目は雨で大会が延期になったため、景福宮と明洞へ観光に行きました。韓国の歴史や食文化に触れ、また純粹に旅行としても非常に楽しい時間を過ごしました。また、日本チームは初対面のメンバーが多いチームでしたが、この1日があったことで、後の優勝につながったと感じています。

3日目には天候に恵まれ、「2024 KUTCA SUMMER CUP with SEOUL」が開催されました。大会初日には、予選リーグ2試合と決勝トーナメント2試合を勝ち抜きました。ここまでの疲労や、異国の地でのサーフェスに苦しむ場面も多々ありましたが、さすが個人戦全国優勝の選手たちといえる対応力で助けられ、試合に勝つことができました。

4日目も大会が続き、日本チームは準決勝・決勝と連勝し、優勝を果たしました。また、OBOG大会も開催され、テニスを通じた世代を超えた日韓交流を感じることができました。

最終日には、韓国連盟の方々とはホテルで、関東の選手とは仁川国際空港でお別れをしました。初日に初めて会った人たちとお別れが、とても寂しく感じるほど、濃密な4日間を過ごすことができました。全員が無事に帰国できて何よりです。

この遠征を通して、まず韓国の学生のフレンドリーさに驚きました。正直なところ、私は韓国語の単語すら一つも覚えていませんでしたが、韓国の学生のほとんどがさまざまな日本語を知っており、中には流暢に話せる方もいらっしゃり、積極的に話しかけてくださいました。昨年のFESTAでは、今回の遠征ほど選手間の交流ができていなかったように感じるので、今後は改善していきたいと思います。

次に、日本と韓国の学生のプレースタイルの違いを強く感じました。日本の学生は筋肉量が多くない選手が多い分、敏捷性やタッチで勝負する選手が多いですが、韓国の選手は筋肉質な選手が多く、フォアハンドやサーブの一撃必殺で勝負しているように思いました。今回の大会は1セット・ノーアドバンテージ形式だったため勝ち切ることはできましたが、もし3セットマッチであった場合、体力面で韓国選手側にアドバンテージがあり、結果は違っていたかもしれません。優勝には運もあったと思います。

最後に、韓国連盟学生役員の組織力を見習いたいと感じました。韓国では日本よりも学生が大会運営をする機会が多く、各大学から年齢や学年の高い学生が1人ずつ選出されており、それぞれの仕事に対する責任感や仕事の分配方法などが非常に参考になりました。

今回のソウルでの大会を開催してくださった韓国の皆様、そして栗山会長や市毛さんなど日本のOGOBの皆様にも、心より感謝申し上げます。FESTAの成功に向けて、残りの期間も全力を尽くしてまいります。

④ 김 윤기영 日本チーム学生副代表

5日間の韓国遠征は、選手と通訳の両方の役割を果たさなければならず、私にとって精神的にも身体的にも大きなチャレンジでした。まず、私のテニス経験は大学内のサークルでの合宿や練習、ダブルスの試合を数回行った程度に過ぎませんでした。そのため、テニスの試合形式やルールにも慣れておらず、長い間テニスから離れていた状況でした。また、急遽参加が決まり、夏休みが始まって一週間も経たないうちに出発する日程だったため、大会に関する事前の情報収集や準備が不十分であったと感じています。幸いにも、韓国側から雇われた通訳の方が日本選手団が不便を感じないように、様々な面で配慮してくださったおかげで、大きな問題なく遠征を終えることができました。また、韓国の選手や役員の皆様が親切に対応してくださったことにも感謝しています。この報告書では、5日間の私の経験を通訳と選手、二つの視点から述べたいと思います。

初日はほぼ関西空港からソウルに移動する予定のみでしたが、韓国連盟の方々だけでなく、日本選手団とも初対面であったため、非常に緊張していました。通訳の経験については、数回学校内外で1日あたり6~8時間程度のアルバイト経験しかなく、一日中、そして頻繁に大人数を引率しながら通訳する経験が少なかったため、心配もありました。仁川空港に到着してからは、韓国の役員の方々と通訳のスヨンさんが、疲れた選手たちを親切にホテルまで案内してくださり、快適にホテルに到着できました。夕食時には、同じテーブルに座った韓国の役員の方々と会話しながら、大会の詳細情報と日程を伺いました。ホテルに戻った後、韓国の役員の方から翌日は日本チームの試合がないと告げられ、夜には韓国観光のコースを通訳二人で相談して計画を立てました。準備時間が不足していたため、観光地を急遽決めざるを得ず、日本選手団の皆さんにより良い案内ができなかったことが心残りです。韓国を初めて訪れる日本選手が多かったため、できるだけ韓国に良い印象を持って帰っていただきたいという気持ちで、ソウルを代表する観光地やショッピングエリアを選んでコースを決めました。まず、韓国で一番有名な宮殿である景福宮を見学し、光化門まで歩いてソウル市内を見物し、広蔵市場で日本選手たちが希望したメニューを楽しみました。その後、ショッピングの聖地と呼ばれる明洞でデザートを楽しみ、自由時間を持つスケジュールを組みました。

三日目からは本格的な試合が始まりました。予想していた以上に日本選手団との実力差が大きく、焦りましたが、試合を重ねる中で日本選手たちが私の実力に合わせて戦略を立ててくださったため、負担を軽減することができました。例えば、並行陣よりも雁行陣を優先し、私が比較的得意とする前方での攻撃を行いやすくしました。また、サーブやリターンを安定してこなせるように練習し、ネット前からのボールを返しやすい姿勢や位置の調整についても、各試合ごとに日本選手団の皆さんが助言してくれました。さらに、サーブの打ち方も不安定でしたが、アンダーサーブから上からのサーブに変更することで、サーブの成功率が上がりました。夕食時には、韓国連盟の方からOBの方々が座っているテーブルで通訳を任されましたが、テニスに関する専門知識が不足しているため、試合形式や専門用語につ

いて理解できずに通訳してしまった場合もありました。

四日目は日本選手団の準決勝と決勝試合のみが残っており、朝は十分に眠ることができました。ホテルから試合会場までの距離が近かったため、移動方法も簡単でした。この日から選手としての自分が試合経験を通じて成長することを実感しました。勝った試合だけでなく、負けた試合でも自分の不足している部分を確認できたからです。また、落ち込んでいた私に対して、多くの激励と助言をしてくださった日本選手たちのおかげで、最後まで諦めずに試合を続けることができました。テニスに関する豊富なノウハウと実力を持つ日本選手たちのおかげで、今回の大会で優勝できたと思います。さらに、試合を重ねる中で、韓国と日本の選手たちが試合以外の場面でも交流を深めていたため、学生交流の面でも成功であったと感じています。また、夕食の時に、韓国役員たちと日本選手たちが交えているテーブルでの通訳を担当しましたが、両方の親密感と関係がより深まったことに実感しました。五日目には、韓国の役員の方々のおかげで、空港に無事到着し、余裕を持って帰国することができました。

今回の韓国遠征は、日本と韓国のテニス選手や役員たちにとって素晴らしい交流の機会となったと思います。通訳としての感想は、韓国連盟の役員と日本連盟の役員とのコミュニケーションを円滑にすることが非常に重要であると実感しました。事前に状況の説明があることで、問題や誤解の可能性を防ぐことができるからです。韓国遠征の経験を踏まえて、今後はこの点に注意しながら通訳の役割を果たしたいと思います。

⑤岡田 康佑 日本チーム選手

今回の遠征では、これまでにない貴重な経験をさせていただきました。まず、言葉の壁に直面し、言語の違いがコミュニケーションを大変難しくすることを改めて実感しました。また、食文化においても大きな違いを感じました。私たち日本人に配慮して、辛さを控えた料理やお店を選んでいただきましたが、それでも普段よりかなり辛く感じるものが多く、少し苦労するスタートとなりました。2日目のミョンドンなどへの観光では、青唐辛子をいただきましたが、その地獄のような辛さに最終日には皆で笑い話になりました。日本ではなかなか普段食べないものにも挑戦することができ、とても良い思い出となりました。

3日目からはテニスを行いました。その頃ようやく、韓国の方々がめちゃくちゃ朝早く起きていることに気づき、僕たちも眠たい状態が続きました。試合においては、日本チームのコートをオムニコートに配置していただき、常にベンチがある状態を整えてくださったり、韓国の選手たちが予想を上回る積極さで話しかけてくれたりしました。試合の始め方や礼儀についても改めて学ぶことができました。日本は世界的に見ても礼儀正しい国と言われていますが、初対面の相手に必ず挨拶をすることや、クリーンなジャッジ、相手を褒め称える姿勢には深い感銘を受けました。普段から私自身もフェアプレーを心がけていますが、競った試合やミスが続く場面では、感情的になってしまい、クリーンなジャッジができていないとは自信を持って言えません。しかし、韓国の選手たちの態度は非常にスポーツマンシップ

に則っており、素晴らしいものでした。負けた選手たちも、私たちの試合を見て応援してくれ、その励ましのおかげで、疲れている中でも自分らしいプレーを引き出すことができました。

試合最終日には OB 戦があり、多くの OB の方々と交流する機会がありました。たくさんの名刺を交換し、最後には OB の方と少しシングルスをさせていただき、とても有意義な時間を過ごすことができました。運営して下さった選手や大人の方々には、心から感謝の意を表します。私自身、IST の大会委員長として大会を開催する難しさや当日の運営の様子を知っているため、その大変さを痛感し、深く感謝しています。

日本チームにおいては、ユンギョンさん以外は東西対抗などで顔を合わせたことのある仲間だったため、より親交を深めることができましたと思います。そして、通訳兼選手として参加してくれたユンギョンさん、韓国のソンヨンさんには、常に私たちの側において、私たちを優先して行動し、サポートしてくれました。連日の疲れもある中で、私たちに尽くしてくれたことに、心から感謝しています。また、引率兼監督の市毛さんには、名刺やテニスウェアの準備、韓国遠征の手配など、本当にありがとうございました。IST で全国大会を優勝し、この遠征に参加できたことは、ただの遠征ではなく、人として少しは成長できた 5 日間だったと感じています。

⑥石田 凜太郎 日本チーム選手

この度、日韓交流戦に日本代表選手として参加し、貴重な経験をさせていただきました。今回、私にとって初めての海外遠征であり、外国人選手との試合を経験することができ、非常に有意義な 5 日間となりました。この大会を通じて、日韓両国の親善と友好の絆がより一層深まったことを実感しています。

この交流戦は 35 年前に始まり、長い歴史を持つものですが、5 年前の新型コロナウイルス感染拡大により一時中断されていました。しかし、市毛さんをはじめとする関係者の皆様のご尽力により、今回再び交流が再開されたことに感謝しております。このような貴重な経験をさせていただけたことに、大変光栄に存じます。

大会は韓国のソウル大学で行われ、試合が進む中で、日本と韓国のテニスマナーやルールの違いを多く感じました。ウォーミングアップの入り方やトスの仕方、サービスゲームの最初に挨拶を行うなど、韓国特有のルールに戸惑う場面もありましたが、これらを通じて韓国のテニス文化を学ぶことができました。

今大会は、男子ダブルス、女子ダブルス、ミックスダブルスの 3 本勝負の団体戦形式でした。日本チームは、関東や関西の大学から集まったメンバーで構成されており、初めて顔を合わせる者も多かったため、ペア合わせに苦労しました。しかし、試合を重ねるごとにチーム全員が団結し、最高のチームとなっていきました。その結果、見事優勝を果たすことができ、非常に喜ばしい結果となりました。

しかし、何よりも嬉しかったのは、韓国の学生たちとの交流を通じて多くのことを学べた

ことです。大会期間中、彼らが積極的に話しかけてくれたおかげで、言葉の壁を感じることなく、非常に有意義な時間を過ごすことができました。また、食事会や観光なども含め、韓国の文化に触れる貴重な機会をいただきました。

韓国に滞在した5日間で、言語の習得はなかなか進みませんでしたが、通訳の方々のおかげで不自由なく過ごすことができました。韓国の学生たちも英語や片言の日本語、ジェスチャーを駆使して、自分の気持ちをストレートに伝えてくれました。そして、テニスというスポーツが、言葉の壁を取り除く不思議な力を持っていることを改めて実感しました。テニスを通じてさらに交流が深まり、韓国の学生たちと記念撮影をしたり、連絡先を交換したりして、親しくなることができました。

この韓国遠征で得た経験は、私にとって非常に価値のあるものでした。この貴重な体験を、今後の自分自身の成長に活かしていきたいと思います。最後に、このような機会を提供してくださった関係者の皆様、そして大会を運営してくださった韓国連盟の皆様に、心から感謝申し上げます。

⑦立身 真菜 日本チーム選手

韓国遠征前、観光やテニスをする事への楽しみを感じながらも、海外での過ごし方や、韓国人とのコミュニケーションについての不安も感じていました。しかし、一緒に遠征に行ってくれた日本チームの選手や、遠征先の選手、韓国で通訳をしてくださったソンヨンさんのおかげで、ほぼ不安を感じることなく楽しく過ごすことができました。現地にいる間は毎晩日本チームの歓迎会や食事会を開いていただき、韓国のテニスコート内でのマナーだけではなく、食文化を学ぶこともできました。遠征先での韓国メンバーによる温かいおもてなしのおかげで5日間がとても素晴らしい思い出となりました。韓国の選手が来日される際に少しでもお返しができたらと思います。

日本チームのメンバーを始めとして、韓国遠征で出会った方々との繋がりを大切にしたいと思います。

とても貴重な経験をさせていただきありがとうございました。

⑧八嶋 亜未 日本チーム選手

この度は、韓国遠征という場で貴重な経験をさせていただきありがとうございました。35年前に始まり、新型コロナウイルス感染拡大の期間を経て再開した素敵な活動に参加させていただくことで学生のうちから日韓交流に触れ合える恵まれた環境を提供していただきました。テニスを通じて国際的な交流ができることは自分の力だけでは到底できないことです。両国の連盟の皆様や、大会運営に携わっていただいている皆様には厚く御礼申し上げます。

今回の遠征を経て、日本の大会に参加しただけでは味わえない様々な体験をさせていただきました。中でも、日韓の文化の違いは日本チームにも良い方向に作用したと思います。

一口に文化といってもテニス、礼儀、食など様々な分野で違いを感じました。

テニスでは、日本ではない挨拶の形式や掛け声を学びました。はじめは混乱しましたが、相手選手や韓国連盟の方、通訳の方から丁寧にご指導いただきました。試合が終わってからも、相手選手やチーム、周りで見てくれていた方々からお褒めの言葉をいただきました。これらを通じて韓国特有のテニス文化を学ぶことができたと思います。

礼儀に関しては、特に韓国連盟の方や場所移動をするときに感じました。年下の方が年上の方に席を譲ったり、日本人チームが移動する際にドアを開け続けてくださったことが印象的です。これは、日本人も積極的に見習うべき風習であると実感しました。

最後に食について、日本と韓国で食べ方が異なっていますが、日本の文化に合わせてくださることもありました。強要される文化ではなく交流できる文化であることはとても素敵なことだと思いました。

これらのことから、総じて日本よりも海外の人に対しての受け入れが寛容で、おおらかなことに感動を覚えました。

この5日間の経験は、学生生活やその先の人生においてもとても価値のある貴重なものであることを実感しました。このような機会を設けてくださった日本、韓国の連盟の皆様、関係者の皆様に御礼申し上げます。

① 西村 弥子 1990年韓国遠征参加選手

参加日程：8月9日～11日

1990年、第2回大会の日本代表選手OGとして、34年ぶりに韓国連盟の大学生テニス大会に参加しトーナメントに出場、女子・男子ダブルスともに優勝した。

今回は、34年ぶりに韓日の学生交流・OBOG大会に応援で参加させていただいた。

参加の理由としては、

- ・熱心な支援活動をされている市毛参与にお誘いを受けたこと
 - ・現在、鳥取県議会議員2期目。昨年秋、本県米子・ソウル間を結ぶエアソウル定期便（週3便）が4年ぶりに就航復活したこと。所要時間約1時間半。
 - ・鳥取県テニス協会会長就任2年目。本年鳥取県と韓国・江原道の交流が復活し、本テニス協会は、12月に江原道からのテニス交流選手（成人）を受け入れることになっている。等、観光や人的交流活動等、今後の本県と韓国、江原道との交流発展のためにもなると思ったため。自費でも参加しようと思ったのは、学生時代に韓国国際交流をした経験は大きな喜びであり、とても貴重な体験だったと共に、御恩返しと今後の活動にいかしたいという思い。
- ※結果的に、渡航費（航空代・復路シャトルバス）は自己負担、往路迎車・食事と宿泊代は韓国持ちとなった。

34年ぶりに訪れてみて、まず仁川国際空港の大きさ、ソウルの経済発展と高層ビルやアパートメントが立ち並ぶ変貌ぶりに驚いた。

今回の、韓日交流で印象に残ったことは、以下の通り。

- ・韓日のテニスレベルが上がった。差があまりなくなった。
- ・会場のソウル大学の広さと、施設の充実ぶりに目を見張った。

一方、テニスコート利用者の更衣室やシャワールーム等はなかった。

(あったのかもしれないが、使えなかったのか、案内はなかった)

- ・韓国側の会長が体調不良(熱中症?)で途中退出された。暑さ対策は今後の課題。

身体を冷やすことも必要かと。また、ケガ等あった場合のメディカルサポート、トレーナーはどうなっているのか、心配になった。

・韓国では、テニスマナーが日本よりおおらか。ゲーム途中でコート周辺を歩く、喋るのも普通。招待選手は心得ているかもしれないが、日本に来られた時には、日本のルールに従ってもらうよう配慮が必要かも。

・韓国も日本も、「目上の人を必ず敬う」「宴席での乾杯習慣」等儒教の慣習が薄らいだ。お酒を強要されることもなくなり、自主性や個を尊重する社会に変化していると感じた。

・朝の移動から、夜の乾杯・食事を共にするところまでが交流大会で、韓国側のおおらかながら、細やかな気配りに感心した。様々な文化や習慣の違い等を話したり、ゲームをしたりとコミュニケーションをとることに長けていた。個性の違いはあれど、皆、話し好き。

・私が腕から流血した(虫刺され?)際、傷の手当をしてくれたり、英語、日本語で色々と話しかけてくれたり、翻訳アプリも駆使して、お互いカタコトでも気にしない。

温かいおもてなしの心を実感した。

役員、学生やスタッフがハードスケジュールの中、心を込めて温かく応対してくれたことに、心より感謝を申し上げたい。また、日本側の役員・選手も、9月に行われるFEST Aで韓国の招待者を温かく迎え入れ、歓待することを願う。そして、今後も韓日・日韓の学生交流が継続され、よりよい国際交流と、双方の発展に繋がることを願ってやまない。

私たちOBOGも、まさに「参加することに意義がある」と実感した。与えられた環境を楽しむことが一番。きょうび、オンライン、ICT、DXが進化を遂げる現代だからこそ、face to faceで直接会い、テニスを通じて、若い人もOBOGも、国境と世代を超えて交流できることはとても貴重だ。さらに、おもてなしで他人に喜びを実感してもらうことが、自分の喜びとなる。韓国と日本の関係は「近くて遠い国」と言われてきた。戦争・侵略など過去の不幸な歴史があり、近年も両国関係が悪化し国交・政治の影響を受けたが、民間や教育の現場では、いかに利害のない友達・友好関係を継続して築くか、が重要になると実感した。それには、真心を込めて利他の精神で取り組むことだと思う。

人口減少の中、スマートフォンやSNSなどいつでもどこでもコンタクト可能になり、プライバシーや個を尊重する社会に変貌し、多様な国際社会・文化に触れることも容易になった。一方で、日本にとっては円安等で海外に渡航するのは金銭的に容易でない状況だ。

それでも、実際に顔を付き合わせてコミュニケーションを取り、体験・実感することで、失敗からも学び、コミュニケーション能力が培われ、社会人になっても人生を豊かに生きることができるし、どんどん人脈が広がってより楽しくなるだろう。ひとりでも多くの学生や次世代の若者、子ども達に、そんな体験を繋いで行きたいと感じた。お隣韓国は実際近い国、となっている。私ももっと経験を積み視野と人脈を広げたい。今回の韓国遠征は、短い時間でハードスケジュールだったが、私の今後の活動にも、改めて示唆を与えてくれたことに、深く感謝を申し上げる。

감사합니다 캄사함니다